

## 放送英語研究

(30年の海外向け放送の現場から…)

角

勝

### はしがき

外国語に上達するには、その外国語で放送されるニュースや番組を、毎日聞くのが有効である、とは良く言われることである。なかんずく、その放送が、テレビよりもラジオの場合に、その効力を発揮する。と言うのも、テレビの場合は、画面が写し出されるので、言葉の説明は最小限で良い。日本語の放送でも、たとえば、野球の実況放送など、以前は、ラジオ放送だったので、アナウンサーが、しゃべりっぱなしだったが、テレビ放送になると、その必要はなくなったのである。ラジオでは、「バッター打ちました。ボールが高く上がりました。青い空に、吸い込まれていきます。ぐんぐん伸びていきます。伸びていきます。あっ、入りました。入りました。レフト・スタンドに入りました。ホームランです。ホームランです。」となるであろう。テレビでは、このような長い説明は、いらぬ。テレビ・カメラで球を追えば、ボールが高く上がるのはわかるし、その日が晴天であることも、テレビ画面を見ていれば、わかることなので、青い空に、吸い込まれていきます、と言う必要もない。むしろ蛇足のおそれさえある。このように、ラジオからテレビに移行するに従って、しゃべりが少なくなってきた。これは、外国語放送でも、同じである。外国語を、浴びるように聞きたければ、外国語のラジオ放送を聞け、と言われる所以である。

画面の助けが無いラジオでは、言葉だけで放送内容を表現するため、外国語であろうと日本語であろうと、制限時間内に、沢山の情報を伝えなければならず、しかも聞いている人に、わかりやすい言葉を、使用しなければならない。このことは、海外向けの外国語放送の場合、特に顕著である。日本では、NHK（日本放送協会）が、放送している Radio Japan が、唯一の海外向けのラジオ放送である。日本のことを良く知らない海外の外国人に、日本独自の風習やお祭りや事物を、取り上げることもあるので、画面の助けが無いラジオの特徴のほかに、異文化とのコミュニケーションの際に生じる壁を、乗り越える必要が出てくる。そのため、例えば、海外向けの英語放送は、日本国内での英語放送よりも、平易な言葉で、難しいことを、表現していると言えるだろう。（ちなみに、Radio Japan は、160カ国以上に、22種類の言葉を使って、四六時中絶えることなく放送を続けている。）

それ故、外国語に上達するには、NHK の Radio Japan を毎日聞けば良いと言うことになりそうだが、ここでは逆転の発想をして、もっと別の方法を探ることにしよう。それは、ラジオの外国語ニュースの書き方の研究である。これは、幾何学の証明の問題を解く方法と同じやり方である。即ち、A は B であることを証明せよ。という問題は、A は B に到達するのは初めから、わかっているので、A からだけでなく、B から A のほうにも攻めてみようというのである。即ち、ラジオの外国語ニュースが書けるようになれば、その外国語放送を聴き取るのは、簡単なことになるのであり、しゃべるのも容易になるからである。なぜなら、ラジオニュース原稿は、話すように書かれているからである。

以下の文は、ラジオの外国語ニュース研究の英語編で、ニュース英語を通じて知る英語らしい文の

研究であり、筆者の、30年近くに渡っての、Radio Japan の放送現場での経験に基づくものである。

## [ 1 ] 新聞英語と放送英語と日常会話

放送英語には、テレビで使用されるものと、ラジオで使用されるもの、があるが、はしがき、にも述べたように、ラジオからテレビに移行するに従って、喋りが少なくなってきたので、ここでは、ラジオ英語とくにラジオでの英語ニュースについて述べる。

英語であろうと日本語であろうと、ラジオニュースは喋るように書かれている。新聞のニュースが目で読むものであり、ラジオのニュースが耳で聞いて理解するものである以上、当然であるが、両者の間に、文体、用語、その他の点で、根本的な違いを作り出している。その相違の主な点を、日常会話とも比較しながら検討しよう。

### § 1 LEAD と WARMING UP

新聞ニュースでは、lead は、読者が全体を読まなくても、大要を知ることが出来るようになっている。detailed-packed lead である。ラジオニュースでは、lead は、寧ろ、soft で simple であり、聴取者の注意を喚起して、あとにくる内容に、引っ張り込む役目をしている。この点、ラジオニュースは、新聞ニュースよりも、はるかに我々の日常会話に近いのである。少し長くなるが、例をあげて説明してみよう。

妻 (Nancy) が家に居ると、夫 (Jim Smith) が、いささか興奮して、勤め先から帰ってくる。彼は、帰宅の途中で、ある事件に、遭遇したのである。

(Jim は Nancy に、こう叫ぶ)

“Say, Nancy! Do you know what I just saw? A bad smashup right over here at the corner of Fourteenth and Maple. Auto hit a truck. One fellow was killed and another one hurt. Yeah, I just came from there. Big crowd around.”

(ここで、妻が口を出す)

“For goodness sake! Right here!  
What happened!”

(夫は、言葉を続ける)

“Well, I was walking along with Graham Webster and we saw this fellow in a coupé going about sixty and coming through a red light at Thirteenth. I said, ‘Graham, he’s going too fast.’ And, boy, he was! Just then a truck — big furniture truck — turned in on Maple, headed north. The fellow in the coupé swerved around another car and straight into that truck. Wham! sounded like a bombshell. Next thing I knew the coupé was upside down and the driver underneath.

Dead as a doornail. They say his name was Frank Ford. Runs a feed mill. The truck driver was just shaken up, I guess, but they took him to the hospital.”

翌日の新聞は、この事件を次のように報じている。

Frank Ford, 42, owner of the Quality Feed Mill, was killed instantly when his automobile collided with a truck at 14th Street and Maple Avenue, late yesterday. The truck driver, Dick Paterson, was taken to Grant Hospital with slight head injuries.

同じく、ラジオは当日夕刻のニュースのトップでこの事件を報じ、

First, we bring you a late report from the Ferndale police station.

An accident at the corner of Fourteenth Street and Maple Avenue has taken the life of Frank Ford, owner of the Quality Feed Mill.

Police say that Ford's coupé collided with a truck, driven by Dick Paterson, who is an employee of the Ferndale Furniture Company. The car, driven by Ford, turned over, killing him instantly.

Paterson is in Grant Hospital with minor head injuries.

と、述べている。

この、2つのニュース文章と、Jim Smith 氏の話とを比べて見よう。

Mr. Smith	新 聞	ラ ジ オ
Say, Nancy! Do you know what I just saw? A bad smash-up right over here at the corner of . . . . .	Frank Ford, 42, owner of the Quality Feed Mill, was killed instantly when his automobile collided . . . . .	First, we bring you a late report from the Ferndale police station. An accident at the corner of . . . . .

この事件の核心は、Frank Ford という男が死んだという事実である。その他のことは、第二次的な事であるが、そのことを念頭に置いて、この3つの文章の出だしを見てみよう。

まず、新聞ニュースでは、いきなり読者をクライマックスに、引っ張り込んで行く。つまり、ニュースで良く言われる、5つのW、——誰が(Who)? 何を(What)? 何時(When)? 何処で(Where)? 何故(Why)?——と1つのH、つまり、どの様にして(How)? が、新聞ニュースの出だしでは重要視される。

しかし、Jim Smithがその妻、Nancyに、話しかける時、いきなり、Frank Ford, 42, owner of the Quality Feed Mill, was killed.... と、いった言い方は、まず、普通は、しない。

Jimは、まず、その妻に、こう呼びかけている。“Say, Nancy! Do you know what I just saw?”そして、ここで妻の注意をひいてから、はじめて彼女を、事件の現場に連れていく。

“A bad smashup right over here at the corner....”そして、最後に、事件の核心、“One fellow was killed....”)が来るのは、やっと五番目の sentence になってからである。

これを、ラジオニュースと見比べてみれば、両者の間には、かなりの相似点があることに気がつくであろう。つまり、日常会話と同じく、ラジオニュースでは、聞く相手の注意を、最初に喚起して、本題に、引っ張り込む Warming up が必要とされているのである。

ところが、事件の主人公が、世間に良く知られた人物や事物や場所などの場合、ラジオニュースでも、本題を、冒頭に持ってくる場合がある。

1963年11月22日（日本時間では23日）に起こった、アメリカのケネディ大統領暗殺のニュースは、この典型的な例である。しかし、この場合でも、冒頭から、事件の全体の説明はせずに、

U.S. President Kennedy is reported to have been shot in Dallas, Texas.

と言ってから後に、大統領は選挙運動のため、ジャックリーヌ夫人を同伴して、ダラス市を訪れ、コナリー・テキサス州知事夫妻と同じ車で、遊説中であつたことを述べている。

この第一報の後、ラジオニュースは、何度も、差し替えになるわけであるが、大統領死亡後の F.E.N. の 23 日午前 4 時 30 分（日本時間）のニュースは、以下のように、述べている。

（※なお、FEN — Far East Network は 1997 年から AFN — American Forces Network となっている。）

In Dallas, Texas, President John F. Kennedy has died. His death was announced today by his spokesman at Parkland Hospital where President Kennedy was carried for treatment immediately after an assassination attempt. The president was shot at 12:30 this afternoon during a stumping tour, downtown Dallas, riding a car with his wife, Jacqueline, and the Texas Governor Connally and his wife..

.....

以上は、ケネディ大統領が、銃で撃たれた後、病院に収容され、懸命な手当がなされたが、その甲斐もなく、死亡した直後のニュースである。

大統領が撃たれたことを、未だ知らなかった人は、President Kennedy has died. と聞いたとき、どうして死んだのだろう。あんなに元気だったのに,, , と思うだろう。即ち、この lead sentence が warming up となり、聴取者の注意をひくことになり、その次が聞きたくなるわけである。

それでは、大統領が撃たれたことを、すでに知っている人は、どうだろうか？ 撃たれた事実が Warming up として、その聴取者の頭の中に入っているので、President Kennedy has died. の lead sentence は事実を知らなかった聴取者と同じ意味での Warming up ではない。ケネディが、テキサス州のダラスで、撃たれた事実を、知っていた人は、この F.E.N. のニュースの冒頭の In Dallas, Texas, と聞いただけで、大統領は、その後どうなっただろうか、と耳をそばだてるに違いない。そして、President Kennedy has died. と聞いて、やっぱり駄目だったか、と思い、もっと詳しいその後の事実を、知りたくなるのである。

このように、事件の主人公が、世間に良く知られた人物、事物、場所、などの場合、ラジオニュースでも、新聞ニュースの読者と同じように、いきなり、聴取者を、クライマックスに引っ張り込んでいくのである。

さて、最初の Frank Ford の死亡のニュースの場合も、同じようなことが言える。ラジオニュースの第一報は、Ferndale の警察署から、リポーターが放送するわけであるが、聴取者は、警察からの現地レポートなので、殺人事件なのか、麻薬事件なのか、あるいは、その他の犯罪事件なのかなどと、注意を喚起させられる。

そして、これが結果的に、Warming up となるわけである。しかし、このニュースも、何度か、差

し替えられ、聴取者の大部分の知るところとなれば、事件の主人公が、世間に良く知られた人物、事物、場所、などの場合と、同じように、ラジオニュースでも、いきなり、聴取者を、クライマックスに引っ張り込んでいくことが出来る。

## §2 ラジオニュースとテレビニュース

近年、テレビカメラの小型化や、人工衛星などの使用による送信技術の飛躍的な発達によって、茶の間に居ながらにして、世界各地で起こった出来事を、目の当りに出来るようになった。そうなれば、現地からのレポートや実況放送などは、テレビの独壇場になり、ラジオニュースは、Round Up(まとめ)が中心となってきた。先にとりあげた Frank Ford の死亡の、現地からのレポートは、テレビ報道が飛躍的に発達する前の、ラジオニュースであり、現在であれば、当然テレビニュースとなる。

ラジオニュースは、Round Up 的なものに重心が移るとすれば、その文章にも一工夫が必要である。ラジオもテレビも喋り言葉を使用することは、共通しているが、テレビニュースの場合は、動いている画面の助けがあるのに、ラジオニュースでは、それが無い。同じような条件にある、新聞ニュースと、比較することによって、ラジオニュースの特徴、ひいてはニュース英語の文章構成について、次に、取り上げる。

## §3 新聞ニュースとラジオニュース

ラジオと新聞では、その文章は、非常に違ったものになっている。まず、新聞の場合は、その記事を、自分の読みたい速度で読むことが出来るが、ラジオの場合は、アナウンサーやリポーターのスピードに、合わせなければならない。新聞ニュースでは、うっかり読み落としたとしても、読み返しができるが、ラジオでは、それが出来ない。新聞では、同じ記事を、何度も、違った時間に、読むことが出来るが、ラジオでは、原則として、一回きりである。新聞では、解からない言葉が出てくれば、辞書をひきながら、読むことも出来る。ラジオは、何回も差し替えて、常に、新しい情報を、提供するが、新聞は、一日一回か、或いは、朝刊と夕刊の一日二回である。そのかわり、新聞は、紙面さえ増やせば、いくらでも盛り沢山の情報を、載せることが出来、百科事典的な詳しさを、追求することさえ出来る。このような特徴から、ラジオと新聞の文章は、根本的に異なっている。

次の新聞ニュースは、1997年4月24日の International Herald Tribune に載ったリマ日本大使公邸人質事件強行解決の記事である。これが、ラジオニュースでは、どうなったのか、以上に述べた、新聞英語とラジオ英語の文章構成の違い、を考えながら検証することにする。

### ‘AN EXAMPLE FOR THE INTERNATIONAL COMMUNITY’

#### Sudden End to Test of Wills in Peru

Lima – It began as another slow, hot afternoon at the Japanese ambassador’s residence, Day 126 of the standoff between the government and leftist rebels holding 72 hostages.

For weeks, the scene outside the residence had been sleepy: A few policemen on guard duty, Red Cross workers routinely bringing in food. It looked as if President Alberto Fujimori and Nestor Cerpa Cartolini, the leader of the hostage-takers, had settled in for a test of wills that might take months more.

Most of the hostages were on the second floor, with the guerrillas on the first floor playing their customary afternoon soccer game. Soccer was one of the many games and exercises that the

rebels and hostages used to while away the time. Most of the Tupac Amaru rebels were jungle-trained youths in their teens and 20s.

Suddenly, secret word was passed among the hostages: Soldiers would attack in 10 minutes. The captives should drop to the floor when they heard an explosion.

Then, in a blur of gunfire and explosions, the daring rescue operation was under way. Four months of fear, tension and boredom were shattered when President Alberto Fujimori seized the precise moment to strike.

Half an hour later, it was over. Two soldiers were dead, and one hostage would later die of a heart attack. None of the 14 rebels, who had held the hostages since invading a glittering diplomatic party Dec. 17, had a chance.

“We always knew that we could do it,” one policeman said.

“We’ve been preparing for this for a long time.”

Stealth and timing were the key. Mr. Cerpa and his three top lieutenants were fighting the inaction with the game of close-quarter soccer with four guerrillas. They were relaxed as the hot afternoon sun beat down. Mr. Fujimori saw his chance. With the use of electronic devices, Mr. Fujimori knew of the soccer match. “The information was so precise and detailed,” he said afterward, “that I didn’t waver for a single minute in giving the order for this rescue operation.”

At 3:17 P.M. he gave the order. Six minutes later the attack began.

The explosion in a tunnel under the main hall instantly killed or wounded the soccer players. It was presumably the same tunnel that Mr. Cerpa said was being dug six weeks ago when he suspended talks with government negotiators.

Mr. Cerpa said the government was digging a tunnel for a surprise attack. A police colonel in charge of security around the ambassador’s residence said then that the accusation was “an invention” of kidnappers.

But a Lima newspaper, La Republica, reported Wednesday that professional miners brought in by the police started digging the tunnel in January, and that the police had played martial music over huge speakers outside the residence to mask the sound of the digging.

After blasting the reception-hall area, part of a 140-man elite military-police team poured through the compound’s front gate and blew open the front door of the mansion.

Other soldiers attacked from the rear, and a third unit climbed to the roof and helped hostages flee.

以上は、The World’s Daily Newspaper の INTERNATIONAL HERALD TRIBUNE (published with the New York Times and the Washington Post) の Thursday, April 24, 1997 版の front page (第一面) に載っていた記事で、新聞には、大統領が大使公邸の前で、兵士に、手をふっている写真と、大使公邸の見取り図が、添付されている。

この新聞記事が、ラジオになると、どうなったのか、次に記す前に、参考のために、簡単な日本語訳を付ける。

‘国際社会に対する戒め’

## ペルーにおける“がまんくらべ”突然終わる

リマ発一日本大使公邸では、ゆっくりと時間が流れる暑い午後がまた始まった。政府と72人の人質をとった左翼叛乱軍との、にらみ合いの126日目だった。

何週間も公邸の外の情景は眠たそうだった。警官が、小数、警備についており、赤十字の人々が定期的に食物を運んできた。アルベルト・フジモリ大統領と、人質をとった叛乱軍の指導者ネストル・セルパは、更に何か月もかかるかも、知れない我慢くらべに、腰を据えて、向かい合ったかのようだった。

人質の大部分は2階に居り、ゲリラは1階でいつもの午後のサッカーをしていた。サッカーは、反乱兵士と人質が時を楽しく過ごすためにしたゲームや運動のひとつだった。トゥパック・アマルの反乱兵士の大部分は、ジャングルで訓練された10代と20代の若者たちだった。

突然、人質の間に密かに伝えられた：軍隊が10分後に攻撃する。人質になっている人たちは、爆発音をきいたら、床に伏せろ、と。

すると、砲火と爆発のもやの中で、思い切った救出作戦が、始まった。アルベルト・フジモリ大統領が、攻撃の時期を精確にとらえた時、4カ月の恐怖と緊張と退屈は、打ち碎かれた。

30分で、救出作戦は終わった。2人の政府軍の兵士が死亡し、人質の1人が後で心臓発作で亡くなることになった。12月17日のきらびやかな外交官のパーティに侵入してから人質をとっていた叛乱軍の兵士は誰も助からなかった。

「我々は、救出できることを、ずっと前から知っていた」と1人の警官は言った。「我々は、長い間この準備をしていたのだ。」

秘密と時期が重要だった。セルパ氏と彼の上級補佐官たちは、他の4人のゲリラ兵と狭いところでサッカーをして、退屈を紛らしていた。彼らは、暑い午後の日差しが照りつける中で寛いでいた。フジモリ氏は、今がその機会だと思った。

電子機器を使って、フジモリ氏はサッカーの試合のことを知っていた。彼は後で、「情報は極めて精確で詳しく、私はこの救出作戦の命令を出すのに、一瞬の迷いもなかった」と言った。

午後3時17分に彼は命令を下した。6分後に攻撃は始まった。大広間の下のトンネルの爆発は、一瞬のうちにサッカーをしていた兵士たちを殺し、或いは、負傷させた。これは多分、6週間前にセルパ氏がトンネルを掘っていると言って、政府の交渉者との話し合いを、中止したときのトンネル、と同じものだったであろう。

セルパ氏は、政府は奇襲の為のトンネルを掘っていると言った。大使公邸周辺の警備担当の警察本部長は当時、その非難は誘拐犯たちのでっちあげだと言った。

しかしながら、リマの新聞ラ・レプブリカは、水曜日、警察が連れてきた専門の鉋夫たちが1月にトンネルを掘はじめ、警察は公邸の外で、トンネルを掘る音を、隠すため、巨大なスピーカーで軍楽を流した、と報道した。

応接広間の区域を爆破した後、140名の精鋭からなる憲兵隊の一部は、公邸の正面から雪崩れ込み、公邸の玄関の扉を爆破して開けた。

他の隊員は後方から攻撃し、また別の班は屋根に登って人質が避難するのを助けた。

以上は、International Herald Tribune の新聞記事であるが、4月23日水曜日8時（日本時間）のRadio Japan のニュースでは、次のように放送された。

In Lima, Peruvian troops have rescued all but one of the 72 hostages who had been detained in the Japanese Ambassador's residence for more than four months.

A Peruvian supreme court judge and two Army commandos were killed and 25 other hostages were injured. All 14 hostage takers were killed during the half-hour rescue operation which was carried out by 140 Peruvian commandos on Tuesday afternoon.

President Alberto Fujimori entered the compound about an hour after his troops stormed the residence. Later, Mr. Fujimori addressed the nation, "We have tried every possible option to settle the issue peacefully. We had no other choice."

The storming of the residence came after negotiations between the Peruvian government and armed members of the Tupac Amaru Revolutionary Movement had failed to bring about a breakthrough. The movement is commonly called MRTA. President Fujimori had steadfastly refused to give in to the armed member's demand for the release of their jailed comrades.

The crisis began on December 17th when armed members of the MRTA stormed the Japanese Ambassador's official residence during a party to celebrate the Emperor's birthday. The women among some 500 hostages were released within hours.

以上は、リマの日本大使公邸人質事件強行解決のラジオでのニュースである。画面の助けが無いラジオでは、言葉だけで、放送内容を表現しなければならない。新聞ニュースは、動く画面こそないが、写真や地図や表などを、添付することが出来る。それらの助けが無いにもかかわらず、制限時間内に、沢山の情報を伝えなければならないラジオニュースは、解かりやすい言葉で、難しいことを表現していると言えるだろう。

この2例 (INTERNATIONAL HERALD TRIBUNE と RADIO JAPAN) を比較すると、まず、一般的に言えることは、実況放送的手法をテレビに譲ったラジオニュースは、より客観的になり、具体的でなくなり、事件を精密に描写することをやめた代わりに、事件を、大掴みにとらえ、その背景や経緯、意義、影響などに力点を置いていることである。そのために、言葉の選択が、より慎重になり、ラジオでのニュース英語は、以下に述べるような特徴を持つことになった。次に、そのような特徴、及び海外向け放送で生じるラジオニュース英語の特徴—これは偶然にも、英語らしい英語にも通ずるのであるが—を列挙し、上記2例を初め、実際の文章を使って説明することにする。

## [2] ラジオニュース英語の特徴

### §1 Conclusion First と分解的表現

ニュース英語でなくても、英語は、その構造上、一つの文 (one sentence) を、とりあげた場合、日本語のように、動詞が最後に来たり、否定を表わす言葉が最後に来たりはしないので、もともと Conclusion First である。

しかし、ラジオニュース英語の場合、文章全体から考えても Conclusion First である。それは、ラジオが、特に海外向け放送の場合、比較的電波の状態が不安定で、いつ中断するかもわからないので、大事なことを先に言うておくのである。例えば、先の Radio Japan ニュース冒頭の部分：

In Lima, Peruvian troops have rescued all but one of the 72 hostages ..... と、聞いただけで、聴取者は「72人の人質のうち71人が救出された」のだな、ということがわかる。4カ月もの長い間、このニュースは、報道され続けたので、日本大使公邸に拘留されていたなど、もうほとんどの人が知っ



ているのである。

In Lima,... と聞いただけで、日本大使公邸人質事件だとわかる人もいるに違いない。全体の文章の、冒頭に、この文を持ってきたのは、これが conclusion だからである。序でに言えば、この lead sentence は、Warming up でもあり、聴取者は、もっと詳しいことが、聞きたくなるのである。次に、

..... the 72 hostages who had been detained in the Japanese Ambassador's residence for more than four months. という文が続くが、これは、72 人の人質というのは、どういう人なのかという説明をしているのである。

.....who had been detained in the Japanese Ambassador's residence for more than four months. {日本大使公邸に、4 カ月以上拘留されていた (人質)} で、分解的表現とでも、言えるだろう。即ち、まず「リマでペルー軍の治安部隊が、72 人の人質のうち、一人を除いて、全員救出した。」といって、それから「それらの人質は日本大使公邸に、4 カ月以上拘留されていた」と、続く。

また、同じ人質事件強行解決のラジオニュースの中に、同じような分解的表現が、他にも、みられる。それは、4 行目、

All 14 hostage takers were killed during the half-hour rescue operation which was carried out by 140 Peruvian commandos on Tuesday afternoon. 及び同じラジオニュースの、13行目、

The crisis began on December 17th when armed members of MRTA stormed the Japanese Ambassador's official residence during a party to celebrate the Emperor's birthday. である。「..30 分の救出作戦で」「12月17日に」と言って、次に、救出作戦の詳細、と、12月17日がどんな日であったのか、を説明しているのである。

これらは、丁度、次の文章、There is a desk / near the window. There is a pond / in the garden. に、分解的表現という意味では、似ていると言えるだろう。即ち、まず、「何処やりに机(池)がある」といって、それから「窓の近く(庭)に」と説明する。このように、まず大体のところを明らかにし、それから、それを詳細に説明するといった行き方は、Conclusion First と一脈通ずるものがある、と言えるかも知れない。英語に一貫した、日本語とは違った、その意味で、英語らしい特徴の一つと言えるだろう。

分解的表現の典型的なものは、例えば、英語で「彼は私の頭を殴った」という場合、いきなり He struck my head という代わりに、まず、He struck me (私を殴った) という。それから on the head と足してその殴った場所を示す。The bullet shot through his left arm. という代わりに、The bullet shot him through the left arm. に、The arrow hit the center of the target. の代わりに、The arrow hit the target in the center. という方が、分解的で、英語らしい表現でもある。つまり、最初の例でいえば、「私の頭」という一個の複合的な概念を、「私」と「頭」に分解して、大きな、あるいは大ざっぱな「私」を先に出し、後から小さな、或いは細かな「頭」を加えて限定する。これが英語的表現であり、ラジオニュース英語に、しばしば、登場する。次に、いくつかを列挙する。

The Japanese yen has increased in value against the U.S. dollar.

(円の値段が米ドルに対して上がりました)

Rice shot skyward in price.

(米の値段が暴騰しました)

She says she'll back Mr.Hatoyama in his political campaign.

(鳩山氏の政治運動を後援しようと彼女は言っています)

Mr.Kan sank in popularity.

(管氏の人気が衰えました)

His speech touched the Opposition on the raw.

(彼の演説は反対党の痛いところに触れました)

Mr.Akashi was utterly disappointed in his expectation.

(明石氏の期待は完全に裏切られてしまいました)

The Iraqis have failed in their objective of destroying the U.S. forces.

(イラク軍の米軍を撃破しようとする企画は失敗におわりました)

At that time, America was at a decisive turning point in its Far Eastern policy.

(当時はアメリカの極東政策の一大転換期でした)

## §2 Compact Style と Clear Explanation

ラジオニュース英語のもう一つの特徴は、簡潔で明晰なことである。それには、名詞構文や、比較・対照を明らかにする表現を使っていることである。また、ある事柄あるいは動作を述べる場合、その経過あるいは動作そのものよりは、その結果、到達した状態に、より多く、眼を注ぐといった表現—結果表現とでも言ったら良いのだろうか—を使って簡潔で明晰なラジオニュース英語の特徴を出している。

### (1) 名詞構文

リマの日本大使公邸人質事件強行解決のラジオニュースの9行目に次の文章がある：

The storming of the residence came after negotiations between the Peruvian government and armed members of the Tupac Amaru Revolutionary Movement had failed to bring about a breakthrough.

これが、まさしく名詞構文で、次の文：

The Peruvian government and armed members of the Tupac Amaru Revolutionary Movement failed to bring about a breakthrough in their negotiations, and the Peruvian troops stormed the residence.

と、比較すれば、名詞構文の方が、簡潔で明晰であり、ラジオニュース英語に、適しているのがわかる。

名詞構文とは、ある事柄を述べる時名詞を使って、或いは名詞を中心として、ということは名詞に prominence をもたせて表現する方法である、といって良からう。

例えば、1. 私は怖い(恐れる)。

a. I fear.      b. I am fearful.      c. I have fears.

の三つのうち、c. がそれである。それに対していえば、a. b. は、それぞれ動詞構文、形容詞構文とでも言えようか。次の例、2. この本は良く売れます。

a. This book sells well.

b. This book has a large sale.

c. This book is a best seller.

では、b. c. が名詞構文である。次に、もう少し例をあげる。

3. 彼が訪ねてきてくれたので、手紙を書く面倒が省けました。

His visit spared me the trouble of writing to him.

(As he paid me a visit, I was spared the trouble of .....)

4. 彼はクラスの中で走るのが一番早い。

He is the fastest runner of the class.

(He runs the fastest among all the boys in the class.)

5. 彼女の声は張りつめていて、余程重大な用向きでやって来た様子が、伺われました。

The strain in her voice told that she had come on a very important business.

(Her voice was strained and it told that ..... )

6. 顕微鏡で調べてみれば、そんな事実の無いことは直ぐわかります。

Microscopic examination will reveal at once that such is not the fact.

(If you examine it through a microscope, you will see at once .....)

7. こうして三年間男女共学の学校に通いながら、彼女は依然として、男の子を怖がっていました。

The three years at the co-educational school had still left her in constant fear of boys.

(Though she had thus attended a co-educational school for three years, she was still in .....)

ここで、多分、こういう意味の名詞構文は英語だけに限っているだろうか、との疑問が生ずるかも知れない。日本語でも、(1) 名詞構文の説明の最初の例：1. 「恐怖心を抱く」や上記の 5. 「彼女の声のはりつめ加減が.....で来たことを告げた」の例のように、名詞構文を使うことがあるではないか、おまけに日本語の場合はそうだが、英語でも、I have fears とかは文語的で、口語では特殊なスタイルの時だけに使われる言い方ではなからうか、と言う人が居るかも知れない。しかし英語では、周知の通り、have a try とか have a look at とか have a swim とか、いう言い方が実に沢山ある。そして、それは単に、try, look at, swim, とするより、口語的である。「彼は射撃がうまい」は大人の会話だったら、He can shoot very well. ではなくて、He is a fine shot. である。「(自動車に) 乗せて行ってやる」が I'll give you a lift. で「私は、どうも人の名前がおぼえられない」が I've a poor memory for names. とするのと同じである。それを考えたら、英語のほうが、はるかに多く名詞構文を使う、と言って間違いない。ラジオニュースでは、限られた時間内に沢山の情報を伝えなければならない。それ故、ラジオニュース英語の特徴は、簡潔であると共に、明晰でなければならない。名詞に prominence をもたせて表現する方法、名詞構文、を用いるのはその為である。ニュース英語の例を、いくつか挙げる。

1. Her dramatic singing was the admiration of all the critics of Paris.

(彼女の劇的な歌い方はパリの全批評家の賞賛を博しました)

2. Former U.S. President Ronald Reagan still plays an occasional game of golf.

(レーガン元アメリカ大統領は今でも時々ゴルフをやりま)

3. Martina Hingis has a good backhand.

(マルチナ・ヒングスはバックハンド《テニスの》が上手い)

※なお、言うまでもないことではあるが、名詞構文を用いると、それにつれて、そうでない場合だと副詞(あるいは動詞)で表わされるものが形容詞に変わってくる。上記 2, 3, がそうである。

名詞構文に関連して、名詞に prominence を与える表現を、もう一つ。われわれ日本人だと、例えば「軽井沢に避暑に行った」の「避暑を」を to spend the summer とか、to avoid the heat of the summer とかやるものである。それを英米のジャーナリトなどは、for the summer とあっさりやってのける。同じような例を、下に挙げる。

A. 日産とルノーの指導者はお茶を飲みながら資本提携の話をしました。

The leaders of Japan's second largest car maker, Nissan, and French auto manufacturer Renault have discussed a capital tie-up over a cup of tea.

B. この着物は彼女のような女性が着たらきっと素晴らしいでしょう。

This dress will surely look lovely on a woman of her type.

C. 彼は拷問にかけられて、それを行なったことを白状しました。

He confessed on the rack that he had done it.

D. タイガー・ウッズは体力を得るために生玉葱を食べました。

American golf player Tiger Woods ate raw onions for strength.

※以上は前置詞の使い方の問題であるが、例えばD. でいうならば、to gain strength とすると、gain と strength の両方に意味の emphasis が置かれる。それに反して for strength とすれば、strength だけに、力点が、置かれる。つまり、これも名詞に prominence を与える表現である。

## (2) 結果を表わす表現と比較・対照を明らかにする表現

名詞構文のほかに、比較・対照を明らかにする表現や、ある事柄あるいは動作を述べる場合、その経過あるいは動作そのものよりは、その結果、到達した状態に、より多く、眼を注ぐ、といった表現を使う事によって簡潔で明晰なニュースの特徴が出せる。

《イ》 **結果を表わす表現** この結果を表わす表現の例として次に挙げる：トルコの地震の際、救助された、被災者の話として、ラジオニュースは、次のように報道した、

He says he awoke to find himself lying in a strange bed.

(目をさますと誰か知らぬ人のベッドに寝ていた、と彼は言っています)

また、倒壊を免れた住民の話として、

The vase in her bedroom was broken to pieces.

(彼女の寝室の花瓶は壊れてこなごなになりました)

He was seriously injured, and for a time it was feared he might bleed to death.

(彼は大怪我をし一時は出血多量で死ぬのではないかと思われました)

西日本の洪水のニュースで在日の欧米ジャーナリトは助かった少女のその夜の話として

The moon vanished not to reappear. (月は隠れて再び姿を現わしませんでした)

とラジオで報道した。この他、補語が結果の状態を示すのに用いられることは、周知の通りであるが、次のようなシベリアからの報道も、この関係で考えて良い。

The river has been frozen solid. (川はかちかちに凍っています)

《ロ》 **比較・対照を明らかにする表現** ラジオニュース英語の特徴の一つ、簡潔で明晰な性質を表わすものとして名詞構文と結果を表わす表現については、既に述べたが、英語では、比較・対照を明らかにする表現が、日本語よりはるかに発達しているうえに、ラジオニュースでは、テレビと違って画面の助けが無い場合、比較対照する言葉の選択によって、印象を、鮮明にしなければいけない。

例えば、炎天下の情景を報道する場合、テレビの時は、ブリキの上に水を数滴こぼして、瞬く間に蒸発する光景を見せれば、直ぐにわかることであるが、ラジオは、そういうわけにはいかない。その際、比較対照できる言葉を選択することによって表現することになる。

The tiles on the roof were hot enough to fry eggs upon.

(屋根の瓦は暑くて玉子が焼けそうでした)

若い美人を表現するのに、テレビでは本人を画面にだせばわかるものを、ラジオでは

The young woman was as beautiful as any I had ever seen.

(その若い女性は私がこれまで見たことのないような美人でした)

と, comment が必要になってくる。

ラジオニュース英語を勉強すれば, 比較対照を明らかにする表現が上手くなる, と言われる所以である。これらの表現といえは, 先ず第一に形容詞や副詞の比較級・最上級, 或いはそれに類するものの使い方である。次に例をあげる。

The reputation of Marlene Dietrich as an actress was never brighter than just before she retired from the stage.

(マレーネ・ディートリッヒの女優としての名声は引退する直前に絶頂に達しました)

The heat in Tokyo has grown less intense.

(東京の暑さは以前ほど烈しくなくなりました)

PLO Chairman Yasser Arafat says that is the farthest he can go in making concession.

(PLO のアラファト議長はもうそれ以上の譲歩は出来ないと言っています)

I don't know when Myanmar's dissident leader, Aung San Suu Kyi, has been more angry.

(ミャンマーの反体制指導者アウン・サン・スー・チーさんがこんなに怒ったためしはありません)

You might have made a worse guess.

(その想像は当たらずとも遠からずというところです)

もっと, subtle で気がつきにくい例を示す。

He worked six months behind the Iron Curtain in Bulgaria on a two-week pass and crack an Arab ban on U.S. correspondents during a Palestine crisis.

(彼は, たった二週間の滞在許可証でブルガリアの鉄のカーテンに潜り込み六カ月も仕事をしましたし, パレスティンに紛争があった時はアラブ側の設けたアメリカの記者に対する禁制を破りました)

※ with a two-week pass でも意味は通るかも知れないが, on とすると, 「それだけの権利で」ということになり, それだけ「六カ月」の気持ちが生きてくる。

### [ 3 ] ラジオニュース英語を書く際の注意点

#### § 1 文章は simple で平易な言葉を使う

ラジオニュース英語では, 一つの sentence の長さを, なるべく短く簡潔にする必要があることは勿論である。識者によっては, one sentence は20語, あるいは, 15語, と言う人もいる。しかし, 長い固有名詞が, 含まれる場合など, これを越えることも有り得る。但し, この場合でも, sentence を, 2つに分けることで解決できる。

簡潔な表現といえは, 文章を simple にする必要がある。即ち, 従属節を多用するのを避けて, sentence を, 二つに分割したりして, 文章を簡潔, 明晰, にするのである。また, 従属節や分詞句で, 文章を始めるのは, 回りくどくなる。direct な sentence にすべきである。

次に, その例を挙げる:

If North Korea takes a constructive attitude over its nuclear and missile program, as well as humanitarian issues, the Japanese government is prepared to improve relations with Pyongyang. (もし北朝鮮が核やミサイル計画と人道的問題で建設的な態度をとるなら, 日本政府は北朝鮮との関係を改善する用意があります)

この文は,

The Japanese government is prepared to improve .....

を先に持って来るべきで、.....with Pyongyang, if North Korea takes..... と if 以下の clause を後に続けるべきである。

次は、分詞句の例：

Speaking at Democratic Party fund-raising dinners in New York on Saturday night, President Bill Clinton said (that)..... は、President Bill Clinton spoke (was speaking) at Democratic Party fund-raising dinners in New York on Saturday night. He said (that).....

として、新しく別に、一つの文として後半と切り離すのである。

放送を聞いている人々の範囲は、新聞の読者に比べると広く、その教育程度も、雑多であることなどから、放送、特に、ラジオでは、平易な言葉が歓迎される。

平易な言葉とは：long word ではなく short word,

fancy ではなく familiar,

abstract ではなく specific, なものを、言うのである。

以上の、long, fancy, abstract な言葉は、ある場合には、最も、意味がピッタリあう時もあるが、それ以外の場合には、出来るだけ避けるべきで、short で、familiar で、specific な、言葉を選ぶべきである。

以上に関連して、次に、これらの言葉を挙げる。

ラジオニュース英語に 出来たら避けたい語句	ラジオニュース英語に 積極的に使いたい語句
accommodations	rooms
ameliorate	improve
approximately	about
commence	begin
deactivate	close, shut off
endeavor	try
finalize	end, complete
implement	carry out
in consequence of	because of
initiate	begin
methodology	method
objective	aim, goal
prior to	before
proliferation	spread
purchase	buy

remuneration	pay
replicate	repeat
socialize	mingle, meet, make friends
substantial proportion	many, much
underprivileged	poor
utilize	use
assist	help
close	end
summon	call
witness	see
dispatch	send
request	ask
currently	now, at present
obtain	get
attempt	try
protocol	agreement
enact	make law
indignation	anger
take into custody	arrest, seize
converse	meet
ponder	think
antagonize	oppose
peruse	read

## §2 誤解を生じ易い言葉の使用や配列に気をつける

日常の会話は、会話の内容が良く理解出来ない場合、相手に聞き返すことが出来るが、ラジオニュースでは、それが出来ない。したがって、混乱や誤解を生じやすい言葉の使用や配列は、極力避けるべきである。

### (1) 代名詞の使用に慎重になること

he, she, it, などの代名詞が、文中で、あまりにも多く使われると、聞く者は混乱する。特に、その代名詞を指す可能性のあるものが、その story の中に、複数存在する場合、慎重を要する。また、人物の名前そのものが、極めて、聞き慣れない場合、肩書きを繰り返した方が、分かり易い場合が多い。

例えば、

The younger brother of China's last Emperor Pu Yi, Aisin Gioro Pu jie, .... (中国清朝最後の皇帝、溥儀、の弟、愛新覺羅溥傑は.....)を繰り返す場合、名前や、he よりも、last Emperor's brother とする方が、聞く者の混乱を防ぐ事が出来る。Pu Yi (溥儀) と Pu Jie (溥傑) の発音は良く似ているし、he では、どちらを指すか、わかりにくい。

また別の例:

Italian President Oscar Scalfaro has designated Mr.Berlusconi as the new prime minister ..... The 57-year-old businessman-turned politician is dubbed "the media magnate" .....  
この場合、アンダーライン上の The 57-year-old businessman-turned politician は Scalfaro の事となるのか、Berlusconi の事なのか鮮明ではない。この場合、名前を出すか、それでなければ、the newly designated prime minister とすべきであろう。

このように、聞く者の誤解を生じさせないように、それが誰を指すのか、何を指すのか、わかるように、放送しなければならない。これは、日常の英語会話でも同じことである。もっとも、日常会話の場合、何を指すのか、わからない場合、聞き返すことは出来るけれども。

## (2) CLAUSE の位置に慎重になること

アメリカの国内放送で、実際に起こった一つの例を紹介しよう。アメリカ、ミッドランド市のネルソン市長の家を、パトリック・フリンという警官が、護衛していたが、ある日、この警官が自殺した。ローカルの放送局は、このニュースを、次のように報じた。

Policeman Patrick Flynn who was assigned to escort Mayor Nelson shot and killed himself today.

しかし、聴取者のなかには、....Mayor Nelson shot and killed himself today. と聞いたから堪らない。問い合わせの電話がひっきりなしに、放送局に、かかってきたという。このように、Clause の位置によっては、誤解が生ずることもあるので、じゅうぶんに注意しなければいけない。

以上のことから、結論出来ることは、文章は、出来るだけ簡単に、まわりくどくならないようにするため、主語と、述語動詞を、なるべく近くに置くことである。

## (3) Lead に unfamiliar な人名・団体名を持って来ないこと

日本経営者団体連盟 (日経連) の根本専務理事が、労働組合の賃上げ闘争に反撃、というニュースでも、文字通り「日経連の根本専務理事は....」とするよりは、

“A spokesman for Japanese big businesses.....

としたほうが、はるかにわかりやすく、聴取者にも親切であろう。日本には、〇〇審議会、〇〇振興会、〇〇連盟、〇〇会議、など団体名が多いので注意を要する。以前、日本が未だ中国を承認していない時代、日中総合貿易連絡協議会という団体があり、“The Japan-China Overall Trade Liaison Council” と言っていたが、この名称を、Lead sentence に持ってきて、これが LT 貿易 (廖承志、高崎達之助の両国通商代表者名にちなむ) の日本元締めだと、わかる聴取者は少なかったと思う。

“A private Japanese trade promotion association” として、後の文章で、日本と中国の民間貿易協定を “take care (charge) of” している、とでもすれば充分で、Radio Japan でも、そのようにした。強いて団体名をあげる必要はない。



要は、名前ではなく、内容であり、団体の性格なり、構成員などを考えて、適宜説明することである。

〇〇審議会も、何々についての政府、総理大臣、あるいは何々大臣の “advisors” と説明的に表現するとか、経済企画庁も常に “The Economic Planning Agency” とせず、時には、“government economic policy planners” とか “government economists” とか砕いて説明する心がけが肝要である。Lead について、序でに言えば、lead sentence で story が、“good” とか “bad” とか “interesting” とか格付けを、しないことである。

例えば、次のごとき “lead” は不適當である。

“Here’s an important story from New York.”

“Here’s an interesting story from Japan.”

“The U-N Security Council made big news today.”

BBC は “BBC has no opinion.” といって、“opinion” を出す時は、“expert” などを使って、“source” を明示せよと言っている。これは Radio Japan も同様である。

### §3 ラジオニュースでの数字の使い方

次は、統計などに出てくる数量や見積額、天災や事故に表れる被害の規模、アンケート調査などに示される数値など、数字に関することである。

新聞のニュースでは、うっかり読み落としたとしても、読み返しが出来るが、ラジオでは、それが出来ない。特に、それが数字ともなると、なおさらである。最初の、lead sentence から詳しい数字が、読み上げられると、心の準備が出来ていないだけに、その数字を正確に把握することは、非常に難しい。この論文の冒頭、『[1] 新聞英語と放送英語と日常会話』の『§1 LEAD と WARMING UP』で述べたように、ラジオニュースの lead sentence は聴取者の注意を喚起して、あとにくる内容に、引っ張り込む役目をしている、言い換えれば、warming up をしているのであるから、最初から、詳細な数字を持ってくるべきではない。lead には、おおまかな数字・傾向を示し、次の sentence から、必要ならば、随時、詳しい数値を出すべきである。

しかし、これには例外がある。外国為替や株式市場の相場である。これらの相場は、lead から精確な数値が示されることがある。また、スポーツニュースの記録や得点なども、同様に取り扱われることがある。ひとまず、実例を示そう：

The Health and Welfare Ministry has announced in its survey of centenarians that the number increased by 1,667 over last year to reach 10,158 -- the 28th consecutive year-on-year increase. (厚生省が発表した100歳以上を対象にした調査によりますと、100歳以上の人口が去年より1,667人増えて、1万158人に達し、28年間連続の増加となりました。)

上記は、100歳以上の人口調査のニュースであるが、最初に述べたように、新聞ニュースでは問題はないが、ラジオニュースでは、読み返しが出来ないで、冒頭の文から、このような詳しい数字を挙げるべきではない。この文は、second sentence に持ってきて、lead sentence は下記のようにすべきであろう。(なを、テレビニュースの場合は、映像の下あるいは上や横に、テロップ《telop》を流して、必要な数値をしばらくの間、送出することが出来るので、数値を聞き落としても、テロップで確認することが出来る。telop とは television opaque project の略である。)

The number of people 100 years of age or older has exceeded the 10,000 level in Japan, marking

the largest-ever increase over last year. (日本では、100 歳以上が1 万人を突破して、前年からの増加数が、過去最高を記録しました。)

このように、外国為替・証券の相場やスポーツの記録・得点などの他は、lead では数値は詳細ではなく、おおまかにすべきである。

では、事故のニュース：

A high-speed passenger train has derailed in northern Germany, leaving at least 100 people dead and some 300 others injured, 200 of them seriously.

(ドイツ北部で、高速旅客列車が脱線し、少なくとも、100 人が死亡し、重傷 200 人を含む、300 人が負傷しました。)

上記及び次のニュースともに、lead なので、数値は、詳細ではなく、おおまかになっている。なお、事故の死者は、増えることはあっても、減ることはないので、このように、数値の前に、at least や more than などがよく使われる。

次に、天災のニュース：

A strong earthquake hit Turkey's populous northwest before dawn on Tuesday(August 17, 1999), claiming the lives of at least 15,000 people and injuring nearly 30,000 others. (強力な地震が火曜日 <1999年 8 月 7 日> 未明、トルコ北西部の人口過密地帯を襲い、少なくとも15,000人が死亡し、30,000人近くが負傷しました。)

次に、統計のニュース：

An Education Ministry survey for fiscal 1997 says that more than 100,000 primary and junior high school students were absent from school for more than a month because they disliked school. This means, the ministry says, one out of every 378 primary school children skipped school for more than 30 days. And, one in every 53 junior high school students played truant. (1997年度に関する文部省の調査によれば、「学校嫌い」のため、1 カ月以上学校に行かなかった小中学生は、10万人以上になりました。これは、378人に、1 人の小学生が、30日以上登校せず、53人に、1 人の中学生が、不登校だったことになります。)

上記のように、lead では、数値は、おおまかになってはいるが、10万人とは、全体に比較して、どのような規模かは、さだかではない。Second sentence では、上のように、378人に1 人とか、53人に1 人とか、或いは、パーセンテージを示して、全体との関連を、明瞭にすべきであろう。

次に、株価のニュース：

The New York stock market roared back on Tuesday(October 28, 1997) from its largest drop since the 1987 crash, marking its biggest point gain ever for a single day.

The Dow Jones industrial average rose 33.17 points to 7,498.32 as investors returned to the stock market on 68th anniversary of the Great Crash of 1929, smashing the volume record with more than 1.1 billion shares traded. (ニューヨーク株式市場は、火曜日 <10月28日>、1987年の大暴落以来、最大の下落をした株価が一転、急反発し、過去最大の上げ幅を記録しました。ダウ工業株平均は、33.17 ポイント上昇し、7,498ドル32セントとなりました。投資家達が、11億株以

上が暴落した1929年の株価大暴落の68周年記念日に株式市場に戻ったためです。)

このような株価のニュースの数値は、おおまかにすれば、その意味がなくなる。1セントでも、前取り引きより、上がれば、上昇であり、下がれば、下落なのであり、数値は精確に表わさなければならない。そのため、7,498.32などと、例文のように、ながい数字になる場合もあり、その場合は、leadではなく、second sentence に持って来るべきである。

次は、外国為替のニュース：

On the Tokyo Foreign Exchange, the Japanese yen hit an all-time closing high of 116.46 yen against the dollar today.

The value of the Japanese currency soared by more than eight yen in a month amid speculations that the group of 7 would agree to a further appreciation of the yen. (東京外国為替市場で、円は、今日、116円46銭の終値としての最高値をつけました。G-7が、一層の円高について、合意するだろうという思惑のなかで、円は1カ月のうちに8円あまりも高くなりました。)

外国為替の数値も、おおまかにしないで、精確に表わすのは、株価の場合と、同じ理由である。但し、株価のように、数値が長くはならないので、lead に持ってくる事が出来る。※なお、116.46 yen は、one-hundred and sixteen point four six yen と読むべきであって、決して、“point forty-six” ではない。

次に、スポーツニュースを2つ：

North Korea's Jong Song Ok has brought the country its first ever medal in the World Track and Field Championships, winning the women's marathon gold medal in 2 hours, 26 minutes, 59 seconds. In the women's marathon at the championships in Seville, Spain, on Sunday(August 29, 1999), Ari Ichihashi of Japan took the silver, with a bronze for Romanian Lidia Simon. (朝鮮民主主義人民共和国のチョン・ソンオク選手は、女子マラソンで2時間26分59秒で優勝し、世界陸上選手権で北朝鮮に初のメダルをもたらしました。日曜日〈1999年8月29日〉にスペインのセビリアで行なわれた、世界陸上選手権の女子マラソンで、日本の市原有里選手は、銀メダルを、ルーマニアのリディア・シモン選手は、銅メダルを、獲得しました。)

In sports: Kiryu Daiichi Senior High School of Gunma Prefecture has won its first senior high school baseball summer championship by defeating Okayama Ridai Fuzoku 14 to 1. The championship was the first for any school from Gunma Prefecture in either the summer national tournament or the spring invitational. (群馬県の桐生第一高校は、岡山理大付属を、14対1、で破り、初めて 夏の全国高校野球選手権大会を制しました。これは、群馬県勢にとって、春の選抜大会と夏の選手権大会を通じて、初の全国制覇であります。)

スポーツでは、“勝ち負け” が最も重要であり、それ自身が Warming Up となる。勝ち負け、の次には、その詳細《得点・記録》が来るのは至極当たり前で、これを、lead に持ってきて、聴取者に、既に心の準備があるので、その数値を把握するのは、比較的容易である。

#### §4 ラジオニュースで使用される英語

放送英語では、「イギリス的英語」を使うべきか、「アメリカ的英語」を使用すべきか、議論的になることがある。著者の所属していた Radio Japan でも、新しくロンドンからイギリス人が赴任したり、ニューヨークからアメリカ人が来たりすると、それらの新人が、夫々、American English にすべきだとか、British が本物の英語とか言い出したものである。例えば、日本の総理大臣のことでさえ、アメリカ人は the Japanese Prime Minister と言うし、イギリス人は、the Prime Minister of Japan と言うべきだと主張する。ロンドンで喋られている英語が必ずしも standard な British English でないように、ニューヨークで話されている英語も必ずしも standard American English ではない。

Spoken English の研究で学位をとったハロルド E パーマー博士も言っているように「本物のとか正真正銘のとか又は純粹のとかいう英語というものは存在しない……」。その反面、方言というものが、存在しているのは、事実で、方言でないものを、標準英語だと、呼ぶことにするならば、ロンドンの方が田舎より標準英語が多く聞かれ、ニューヨークの方が地方でより標準英語が多く普及されていると言うことは大体において事実である。ただし、それはある教育水準 (cultural level) を仮定していることは勿論である。

標準英語は、ロンドンだけでなく他の地域にも理解され得るが、方言が、ロンドンで広く理解されるかどうか、疑問である。この傾向は、ニューヨークと地方の、関係でも同じである。このため、限られた地方向けのローカル放送でもない限り、方言は使うべきではなかろう。

イギリスの南西部のウェールズ地方では、その地方固有のウェールズ語を保存する為に、小学校ではウェールズ語を必修科目としている所もある。ローカル鉄道の乗務員たち同士では、ウェールズ語が話されているが、勿論、乗客の我々との会話には、英語が使用されるので不自由はしない。英語について言えば、アメリカだけの英語、イギリスだけの英語なるものを保存しようという政策があるとは聞いたことがない。

今や、英語は国境を飛び越えて、どの大陸でも喋られている。イギリスとアメリカの共通語は、共通の文化と遺産を世界中に伝播しているので、多様性の中にも、時がたつに従って、統一の方向に向かうものと思うが、まだ多様性の方が強いので、放送する方としては、英・米の違いを頭に入れながら、何処の地域の人にも、わかる英語をめざすべきである。

具体的には、同じ意味のことを、アメリカ人とイギリス人が異なった語句表現を用いて言い表す場合よりも、同一語句を、アメリカとイギリスで異なった意味に使っている場合に、特に注意しなければならない。一般的には、広範囲で深い異文化への理解が、必要ではなかろうか。

以上に関連して、次に、同一語句を、アメリカとイギリスで違った意味に用いているものを、列挙する：

	米語（特有）の意味	英語（特有）の意味
thread	木綿糸	麻糸
available	当選の見込みある	出馬可能である
avocation(s)	副業、余業、趣味、道楽	本職、職業
backstop	(野球)捕手背後の固定網	(クリケット)外野捕手
banquet	馳走、宴会(普通のものにも)	饗宴、大宴会(豪勢なもののみ)
bill	紙幣(= bank-bill)	為替手形

biscuit	菓子のような(饅頭形)パン	ビスケット
blooded	純種の, 良種の, 生まれの良い	血の
blue-book	職員録, 名士鑑, 紳士録	議会発行の報告書
bug	昆虫	南京虫
candy	砂糖菓子一般	氷砂糖
canvasser	投票数点検者	運動員, 遊説者, 勧誘員, 注文取り
cereals	朝食用のコーンフレークスやオートミール等	穀物, 穀類
class-book	組出席調査簿, 卒業記念アルバム	教科書
clever	気立ての良い, 好人物の	賢い, 抜目のない
corn	とうもろこし	穀物類・特に小麦
cute	可愛い, 愛らしい	利口な, 如才ない
dessert	デザート(菓子・果物・料理した果物も含む)	生の果物のみ(食後の)
(the) East	アメリカ東部, 東部地方	東洋
emigrate	外国及び他州へ移住する	外国へ移住する
ensign	海軍少尉	旗手(元は歩兵少尉)
faculty	教授団, 職員	学部, 分科
fire company	消防隊	火災保険会社
(the) first floor	一階	二階
locust	蟬	いなご
lumber	材木	がらくた, 屑
(the) Modern Athens	ボストン市の異称	エディンバラ市の異称
pennant	優勝旗	細長い三角旗, 吹き流し
physician	(一般に)医者	内科医
public school	公立小・中学校	上流子弟の大学予備校(Eton, Harrow の様な)
quiz	試問する, 試験する	からかう, 嘲笑する, じろじろ見る
redcap	駅の赤帽	憲兵
register office	職業紹介所	登記所
sauce	果物を煮てグタグタにし, それを食べるもの	いわゆる調味料のソースで, 食物にかけるもの
sleeper	寝台車	(鉄道の)枕木
smart	抜目のない	服装のきちんとした
subway	地下鉄	(主に歩行者用の)地下道

suspenders	ズボン吊り	靴下止め
tax	(一般に)税	国税(地方税は rates)

次に、米、英、共通の語句で、アメリカでは特別な意味に用いられる言葉を列挙する。

	アメリカでの特殊な意味	一般共通の意味
angel	演芸等の事業投資者・後援者・大仕掛の犯罪資金提供者	天使
back number	時代遅れの人	月遅れの雑誌
Bourbon	頑迷な保守党員，反動政治家	ブルボン王家の人
bulldog	夕刊の第一版，トランプの王様	ブルドッグ，勇猛な
century	百ドル，百ドル紙幣	一世紀(百年)
cockney	軟弱者(都会の)，めめしい男，きざなやつ	ロンドン児，ロンドン言葉
weasel	意味の曖昧な言葉，(真意を)はぐらかす	いたち
cooler	留置場，監獄，刑務所	冷却器，清涼飲料
dig	がり勉家，勤勉な学生	一掘り，一突き，あてこすり
dove	非常に感情的な人	鳩，可愛い人
dynamiter	積極的な野心家	ダイナマイト使用者(特にテロリスト)
equity	剰余財産	公平，公正，衡平法
Gotham	ニューヨークの異名	英国イングランドの村(村人達が愚人を装った)
heavy-weight	有力者，勢力家，才人	重量級選手(拳闘・レスリング・重量挙げ)
incorporate	有限責任会社にする	合体させる，合同させる
jam	(法案を)強引に通過させる	詰め込む，塞ぐ
joker	法案を骨抜きにする目的で入れてある目立たない条項	冗談を言う人，生意気な奴，トランプのジョーカー
juice	石油，ガソリン	(果物や野菜の)汁，液
lame duck	落選議員	役に立たなくなったもの(人)，破産者，廃棄船
melon	分配する利益	メロン，まくわうり
mustard	味な奴，熱意のある人，味な物	辛子
office	診療所，治療室	事務所，事務室
parole	(囚人を)仮出獄させる	捕虜を宣誓の上解放する
peanut	つまらぬ人物，くだらぬ政治	南京豆，落花生
peddler	(各駅停車の)のろい列車	行商人
pleb (=plebeian)	士官学校・兵学校の最下級生	平民，庶民

policy	一種の富くじ	保険証券
portfolio	(仲買人・会社所有の)有価証券類	紙挟み, 折匏, 書類匏, 大臣の地位(職)
pulp	低級な安雑誌	パルプ, 繊維紙料
repeater	一選挙に二重投票する不正投票者	繰り返す人, 暗誦者, 連発銃
reverent	強い・きつい(ウィスキー)	尊敬すべき, 敬虔な
run-off	降雨量, 流量	同点者の決勝戦
scratch	候補者名簿から除名する	掻く, ひっかく
screw	難問題を出して生徒を苦しめる先生, 手厳しく試験する	ねじ, らせん, 推進器, ひねる
sheba	性的魅力の強い美人(シバの女王から転化)	南アラビアの古代王国
stump	遊説する	切り株, 重苦しく歩く, とぼとぼ歩く
toll	餌で誘う, おびき寄せる	通行税を払う, 通行税
trap	(船や車の中の)密輸品や禁制品の隠し場所	罠, おとし穴

## あとがき

ケネディ大統領暗殺事件の頃から30年ちかくに渡って、著者は、Radio Japan で外人ジャーナリスト達と一緒に、毎日、朝から晩まで、或いは、夜から朝まで、絶え間なく、外電と格闘しながら、英語ニュースを、書き続けてきた。

外人ジャーナリストは、英、米、加、豪州、ニュージーランド、アイルランド、など、英語を母国語としている国からの人々は、勿論、その他、英語が堪能で、現地事情に精通している、インド、フィリピン、コロンビア、アルゼンチン、グルジア、アルメニア、その他、世界の各地から集まって来た人々も、英語ニュース班にいた。

本文にも述べたような、ニュース英語の特徴を考えながら、毎回より良い原稿を作成するよう努めてきた。そして、その shift の仕事が終わると、その shift (交替制勤務の一団) 全員に集まってもらい、その日に起こったニュースについて、討議し、互いのニュースを批判しあい、切磋琢磨したものである。どのような原稿が、良いラジオニュース英語かなど、ニュースの書き方については、大体みんなの意見は、いつも一致したものであるが、「イギリス的英語」を使うべきか、「アメリカ的英語」を使用すべきか、いつも議論的になったものである。当然であろうが、イギリス人は British English を、アメリカ人は、American English を使うべきだと主張したものである。それらの主張に、カナダ人、オーストラリア人、ニュージーランド人、アイルランド人、が加わるのであるから、なかなか結論に達することが出来なかったものである。

30年ちかくの Radio Japan の放送現場での経験から、良いニュース英語を書くことは、結果において、英語らしい文を、書くことになる、ということが、わかってきた。しかし、アメリカ英語を使うべきか、イギリス英語を使用すべきかについては、上記のように、なかなか難しいと言うことが、言えると思う。特に、同一語句を、アメリカとイギリスで、異なった意味に用いる場合に、注意しなければならない。しかし、放送を聞いている人々の母国語が、アメリカ英語かイギリス英語かという事実の他に、その人々の範囲が、新聞の読者に比べると広く、その教育程度も雑多である事などを考えると、ラジオニュース英語では、平易な言葉と簡明な表現が歓迎されるので、母国語が、何れの英語でも、理解できるよう工夫すべきである。同一語句を、違った意味に用いる場合は、次の sentence でより詳しく説明し、誤解のないようにすべきであろう。ただし、最近の傾向として、しだいに、この両英語が、放送英語の分野では、歩み寄りをみせている。例えば、billion は、従来は、アメリカでは、十億の意味であり、イギリスでは、一兆の事であったが、放送に関する限り、十億の意味で使っている局が多い。

このように、英語と米語とが、放送を通じて、一様化している。しかも、直接耳に訴える言葉であるから、複雑な文章が避けられ、簡単な文の構造と短い単語が、尊ばれるのである。こうした標準化の作用は、現在において特に必要であろう。そこで、誰にでもわかるということが、放送での言葉の本領であるから、放送、とくにラジオニュースは、英語の標準化と言うことに重要な貢献をしているに違いない。

## 参考資料— 1

Radio Japan English News STYLE BOOK 1978 年版 (Radio Japan-NHK)  
STYLEBOOK AND LIBEL MANUAL 1986 年版 (The Associated Press, New York)  
THE WORD 1982 年版 (The Associated Press, New York)



BROADCAST NEWS HANDBOOK 1982 年版 (The Associated Press, New York)  
 JANE'S FIGHTING SHIPS 1981-1982 年版 (Janes Publishing Company, London)  
 JANE'S ALL THE WORLD'S AIRCRAFT 1975-1976 年版 (Janes Publishing Company, London)  
 JANE'S INFANTRY WEAPONS 1975 年版 (Janes Publishing Company, London)  
 THE STATESMAN'S YEAR-BOOK 1983-1984 年版 (Macmillan Press, London)  
 THE WORLD THIS YEAR 1971 年版 (Simon and Schuster, New York)  
 CHINA DIRECTORY 1983 年版 (Radiopress, Inc. Tokyo)  
 WHO'S WHO 1976 年版 (Adam and Charles Black, London)  
 QUID 1984 年版 (Robert Laffont, Paris)  
 Radio Japan 英語ニュース原稿 (1963 年-1992 年)  
 INTERNATIONAL HERALD TRIBUNE (1964 年-1999 年)  
 THE TIMES (1963 年-1992 年)  
 THE NEW YORK TIMES (1963 年-1999 年)  
 THE JAPAN TIMES (1963 年-1999 年)  
 ASAHI EVENING NEWS (1963 年-1999 年)  
 THE DAILY YOMIURI (1963 年-1999 年)  
 TIME (1963 年-1999 年)  
 NEWSWEEK (1963 年-1999 年)  
 All India Radio (1963 年-1972 年)  
 Radio Afghanistan (1963 年-1972 年)  
 Radio Hanoi (1963 年-1972 年)  
 Radio Pyongyang (1963 年-1972 年)  
 この他アジア地域の国際放送(1963 年-1972 年)  
 Voice of America (随時)  
 Far East Network (随時)  
 Radio Moscow (随時)  
 Radio Peking (随時)  
 BBC, CBS, CNN, NHK-WORLD, この他 TV 放送(随時)  
 THE CONCISE OXFORD DICTIONARY 1978 年版 (Oxford University Press)  
 WEBSTER'S NEW INTERNATIONAL DICTIONARY 1925 年版 (G. & C. Merriam Company)  
 リーダーズ英和辞典 1984 年版 (研究社)  
 ランダムハウス英和大辞典 1979 年版 (小学館)  
 最新「タイム」攻略辞典 1997 年版 (講談社インターナショナル)  
 ニューベリーハウス・アメリカ英語辞典 1996 年版 (桐原書店)

## 参考資料— 2

Philip's ATLAS OF THE WORLD 3rd edition 1993 年版 (George Philip Limited, London)  
 日本分県地図地名総覧 1988 年版 (人文社)  
 広辞苑 第 4 版 (1991 年) (岩波書店)  
 アポロ百科辞典 1974 年版 (平凡社)  
 知恵蔵 2000 年版, 1991 年版 (朝日新聞社)  
 世界年鑑 1999 年版, 1997 年版 (共同通信社)  
 現代用語の基礎知識 1998 年版 (自由国民社)  
 イミダス 1997 年版, 1993 年版, 1990 年版 (集英社)  
 Japan Almanac 1995 (朝日新聞社)  
 1989 WORLD HOLIDAYS (KDD クリエイティブ)

朝日新聞の重要紙面 1972-1998 年版 (朝日新聞社)  
朝日新聞百年の重要紙面 (1879 年-1979 年) (朝日新聞社)  
国際法・国際政治辞典 1957 年版 (青林書院)  
対日平和関係条約集: 早稲田大学外政学会編 1951 年版 (敬文堂)  
貿易為替用語辞典 1992 年版 (日本経済新聞社)  
時事英語情報辞典 1997 年版 (研究社出版)  
8 カ国科学用語辞典 1997 年版 (講談社)  
こちらラジオ・ジャパン 1985 年版 (日本放送出版協会)  
ラジオ・トウキョウ 全 3 巻 1988 年版 著者: 北山節郎 (田端書店)  
ピース・トーク (日米電波戦争) 1996 年版 著者: 北山節郎 (ゆまに書房)  
ラジオ演出読本 1950 年版 著者: ベルナール・クーパー (日本放送出版協会)  
世界の放送局ガイド 1976 年版 (誠文堂新光社)  
FEN ガイド 1980 年版 (アルク)  
AFN ガイド 1999 年版 (アルク)  
ラジオ・テレビの英語 1963 年版 著者: 木村生死 (研究社)  
New Japanalia -Past & Present- 1977 年版 著者: Lewis Bush (The Japan Times)  
英語で話す日本の心 (英文日本大事典) 1996 年版 (講談社インターナショナル)  
英語で話す日本経済 Q&A 1995 年版 (講談社インターナショナル)  
日商岩井の英語でビジネス 1986 年版 (サンケイ出版)  
アメリカ英語とイギリス英語 1996 年版 著者: 大石五雄 (丸善)  
日米口語辞典 1977 年版 (朝日出版社)  
英米語対照辞典 1952 年版 (篠崎書林)  
知的用語事典 1979 年版 (講談社)  
アメリカ 50 州を読む地図 1997 年版 著者: 浅井信雄 (新潮社)  
世界の民族地図 1998 年版 著者: 高崎通浩 (作品社)  
宗教世界地図 1998 年版 著者: 石川純一 (新潮社)  
世界紛争地図 1998 年版 著者: 松井茂 (新潮社)  
A DICTIONARY OF MODERN BRITAIN 1993 年版 (南雲堂)  
CURRENT ENGLISH 1998-1999 年版 (成美堂)  
EUROPEAN TIMETABLE 1999 年版 (Thomas Cook)  
Petit ROBERT 1974 年版 (Dictionnaire LE ROBERT)  
仏和大辞典 1981 年版 (白水社)  
独和大辞典 1985 年版 (小学館)  
新スペイン語辞典 1992 年版 (研究社)  
博友社ロシア語辞典 1994 年版 (博友社)